

おとなりの肉用牛農家さん

安来市立広瀬小学校四年 岩田結優香

わたしのとなりの家は、牛を三十頭がいて
 いる肉用牛農家です。牛きかうというのはい
 ただエサをあげてかわいがればいいというの
 では、ありません。生き物には命があります。
 だから一年中三百六十五日休みは、ありませ
 ん。毎日朝ばん、エサのじかんひきしてコエ
 出しをします。どちらもとてモカがいる仕事
 です。牛のいる牛しゃには、おがくずといっ
 てノコギリで木を切る時に出るくずをしまつ
 めています。牛が足をすべらせないように、
 すべり止めにもなり、尿をすい取ってくれま
 す。ふん尿のまじったおがくずは、すごく重
 く、スコップですくい取るのにとてモカがい
 るそうです。でもふん尿はエサのえいように
 なって、立っぱな野さいができます。わたし
 の家の前の田んぼには、ぼく草といって牛の
 エサとなる草を育てています。ぼく草は、か
 り取った後、ラッピングマシンというきが

いを使っ、て、ポリエチレンのフィルムでつつ
んで発、こうさせます。そうすると、長持ち
するそうです。ときどき子牛も生まれます。
小さな子牛は、と、てもかわいいです。でも
生後ハカ月くらいで、市場に出荷されます。
はなればなれにな、た親牛は、モーモーと朝
からばんまで何日も悲しそうに鳴き続けます。
母牛のモーモーと子牛をよぶ鳴き声を聞くと
わたしも悲しい気持ちになり、生まれて一年
もしない間に親から、はなされてしま、う子牛

の事を考え、むねが苦しくなります。でも、
売られてい、た子牛は、また他の人の手で大
切に育てられ、た、ぶりの肉をつけ大きなり
また人の手で肉になります。家族みんなが笑
顔になるお肉料理だけど、牛がいきなり牛肉
になるわけではありません。お肉になるまで
の間、たくさんのお人が関わ、ています。命が
食べ物に変わ、ていく、だから、いただきます
す。と感、し、て食、べ、な、く、ては、い、け、ま、せ、ん。
わたしのお友、達、が家、に、送、び、に、来、た、ら、必、ず、と

なりの家の牛を見に連れていってあげます。
初めて牛を見たお友達は、「くさくさい」とか
「大きくてこわい」とか言います。たし
かに、「オイはするし、モーモー鳴くし、黒
くて大きくて少しこわいかもかもしれません。で
も、わたしたちがかんたんじ、食べられるス
テーキやハンバーグ、何も考えず当たり前
に食べている目の前のお肉は、ある肉用農家さ
んがわたしたちの口の中に運はれるまで、大
切に大切に育てられた牛で家族のようかえん
ざいだ。たのかも知れません。」「いただきま
す」は料理をじゅんびしてくれた人に対す
る感しゃの意味だけではありません。世の中
には、いろんな仕事があつて、いろんな思い
をしながら働いている人がいます。それか
は、命をくれる生き物にも働らいてくれてい
る人にも感しゃしてのこさず食べるようにし
たいです。